

生涯にわたる「主体的な学び手」をはぐくむために

～学校段階等間の接続の重要性を認識して～

生涯にわたって学び続ける社会へ

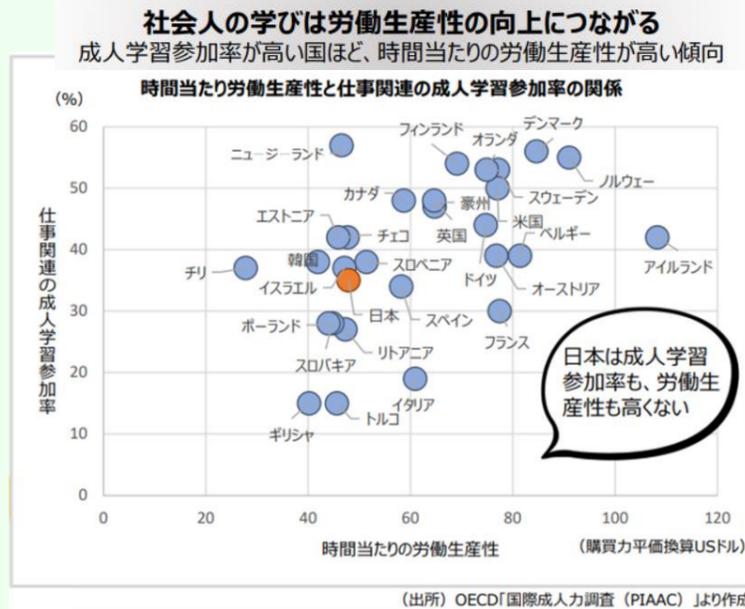
「教育未来創造会議」第1次提言によると、これからの社会像として国際競争力が低下し我が国の生産年齢人口はさらに減少する中、我が国の未来を支える人材育成は急務とされています。そんな中、このような未来を支える人材像として、「好きなことを追究して高い専門性や技術力を身に付け、自分自身で課題を設定して考えを深く掘り下げられる人材」「多様な人とコミュニケーションをとりながら、新たな価値やビジョンを創造し、社会課題の解決を図っていく人材」が掲げられています。また、議論の中で「特に初等教育で一番大事なことは、自分の好きなものをとことん地球の裏側まで掘ること。自分の個性を尊重する教育から始めなければならない。」という提言もなされています。

日本の生産年齢人口の割合が減少する中において、社会人の学びは労働生産性の向上につながります。左の資料は、成人学習参加率が高い国ほど、時間当たりの労働生産性が高い傾向を示しています。

日本は、OJT以外の企業の人材投資は諸外国と比較して低く、社外学習・自己啓発を行っていない個人の割合は半数近いというデータもあります。

誰もが生涯にわたって意欲を持って学び続けるために、幼児期から高等学校までの教育の在り方について、改めて考える必要があります。

【出典】
内閣官房教育未来創造会議
『我が国の未来をけん引する大学等と社会の在り方について（第一次提言）』 令和4年5月



目指すところに向かい、全教職員がリーダーシップを発揮し、組織を着実に前に進める

【京都府の目指す人間像】
めまぐるしく変化していく社会において、変化を前向きにとらえて主体的に行動し、よりよい社会と幸福な人生を創り出せる人

これは、京都府の教育の基本理念として掲げられている「目指す人間像」です。「目指す人間像」ですから、児童生徒のみならず、私たち大人もこのような人間像を目指します。一人一人の教職員が、自分事としてこの方向性を認識し、主体的に学び続けることが大変重要です。一人一人の教職員が同じ方向を目指すことにより、学校全体としても大きな推進力が生まれます。

【中丹教育局コンセプト】
豊かに学び続け 未来を拓く力をはぐくむ中丹の教育

「人生100年時代、主体的に楽しんで学び、目標に向かって粘り強く努力し、新しい時代を創造するような人に育てほしい」という願いを込めて、この度、新たなコンセプトの下で中丹の教育を推進します。

令和5年度京都府中丹教育局学校教育取組の重点は、魅力ある学校づくりです。それを「課題解決型の学習の推進」と、「不登校の未然防止と適切な対応」を両輪として推進します。中丹地域の園・小・中・高等学校がひとつとなって取組を推進することで、きっと大きな力が生み出せるはずで、そのために教職員一人一人が主体的に動くこと、全教職員がリーダーシップを発揮することが求められます。子どもたちの幸せのため、教職員の幸せのため、「子どもを育てる学校」から「子どもが育つ学校」へとチーム学校としての推進体制を構築しましょう。

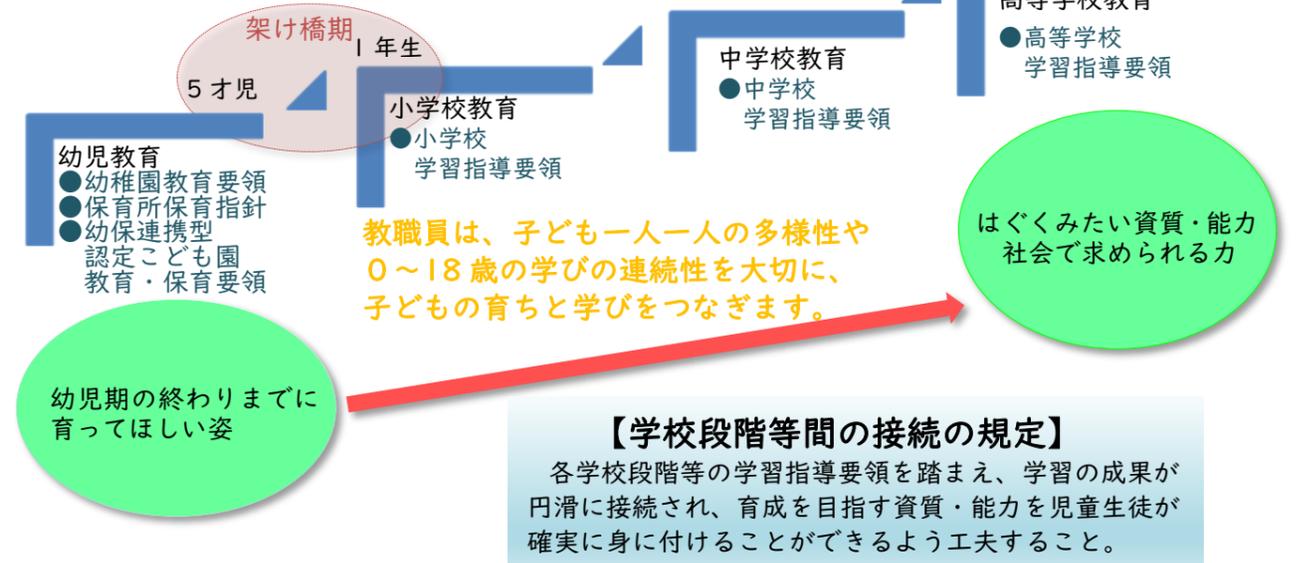
「わくわくする学び」を経験し、「学びに向かう力」をはぐくむ

今回の学習指導要領の改訂においては、幼児教育・小学校教育・中学校教育・高等学校教育の連続性が育てたい資質・能力の育ちにおいて整理されました。その枠組みが、「知識及び技能」「思考力、表現力、判断力等」「学びに向かう力、人間性等」です。幼児期には自発的な遊びを通してその資質・能力をはぐくみ、それを基盤として小学校以降では教科等の学びを通して基礎の育成を図り、小学校、中学校、高等学校の発達段階に応じて資質・能力を系統的に育成していくことになります。そのためには、各園校種の教育内容を相互理解し、その上で各段階で身に付けさせたい資質・能力をはぐくむことが大切です。

この学校段階等間の接続にあたっては、「子どもは生まれながらに学ぶ意欲と学ぶ力をもった有能な学び手であること」「子どもが進学に合わせて準備をするのではなく、学校が子どもに合わせて準備をすること」が大前提となります。このように生涯にわたって学び続ける資質・能力をはぐくむ「わくわくする学び」とは、どのような学びでしょうか。このあとの実践事例等で詳しく紹介します。

また、「学びに向かう力」についても児童生徒の非認知能力の変容を見取り、児童生徒の自己調整や教師の指導改善に生かす「京都府学力・学習状況調査～学びのパスポート～」がいよいよ令和5年度からスタートします。

●「連携」から「接続」へ



幼児期の終わりまでに育ってほしい姿

【学校段階等間の接続の規定】
各学校段階等の学習指導要領を踏まえ、学習の成果が円滑に接続され、育成を目指す資質・能力を児童生徒が確実に身に付けることができるよう工夫すること。

「社会の変化に対応する」とともに「自分たちの社会は自分たちで創る」という意識の醸成を

めまぐるしく変化する社会において、私たちにはその変化に対応し、主体的・協働的に課題を解決し、よりよい社会を創造する力が求められています。新たな価値を創造し、共に幸せに生きる社会の担い手となること。そのためには、「自分たちの社会は自分たちで創る」という当事者意識を持った社会人の育成が非常に大切です。この力は、初等中等教育段階から育成しなければ、社会に出た時にすぐに身に付くものではありません。

令和4年12月に生徒指導提要が12年ぶりに改訂されました。その基盤となる考え方は「発達支持的生徒指導」です。あくまでも、児童生徒が自発的・主体的に自らを発達させていくことが尊重され、その発達の過程を学校や教職員がいかにか支えていくかという視点に立っています。このことから学校の存在意義や教職員の役割とは何かを改めて問い直す必要があります。学校は社会の縮図です。「自分たちの学校は自分たちで創る」という意識のもと、例えば学級や学校のきまりを児童生徒が自分事としてその意味を理解し、自主的に守ったり見直しを図ったりすることが求められています。

生涯にわたる主体的な学び手をはぐくむために、教職員も主体的に学び続けましょう。